

【ポスター発表】

社会福祉・教育実践プログラムに関する研究

- 実学臨床教育プログラムを履修する学生の意識 -

東北福祉大学 阿部 利江 (7795)

千葉 伸彦 (東北福祉大学・6188) 佐藤 泰伸 (東北福祉大学・7758)

大橋 厚太 (東北福祉大学大学院・8185)

社会福祉・教育現場、理論と実践の融合、長期継続的な学び

1. 研究目的

本学総合福祉学部では『特講 実学臨床教育』(以下;本教育プログラムとする)を開講し10年目を迎える。「理論と実践の融合」を教育のねらいとした取り組みで、大学初年次から社会福祉・教育の現場で長期にわたる継続的な実践をおこなってきた。

本研究は、学生が本教育プログラムをどのような意識で学んでいるのか、また、社会福祉・教育現場での実践を通して、大学入学時に描いた現場の印象がどのように変容しているのか、学生の学びの振り返りから明らかにし、これからの本教育プログラムのあり方を検討する。

2. 研究の視点および方法

1) 研究の視点

本教育プログラムは、社会福祉・教育専門職を養成する実習とは異なるが、対人理解・対人援助の支援につながる学びが基盤にある。また、学生自らが社会福祉・教育現場で課題を発見し、どのような方法で解決することが可能か、実践ばかりでなく理論を深めながら取り組んでいくこともまた必要なことである。しかし、社会福祉・教育現場における実践が、学生にとっては専門職同様の支援に関わることや、現場を研究(調査)することに捉える傾向が強いようだ。したがって、「理論と実践の融合」を果たす社会福祉・教育実践プログラムの教育支援体制を再考していくことが重要になる。

2) 対象と手続き

本教育プログラムを受講する学生95名。平成22年度までに本教育プログラムを継続的に受講している学生である。調査票は4項目11の質問であり、本教育プログラムの振り返りとなるよう作成した。新年度1回目のガイダンスにて調査票を配布し、回収は本教育プログラムの事務窓口で学生個人が直接提出することとした。

調査期間は2010年4月27日～5月20日までの約1か月間である。

3. 倫理的配慮

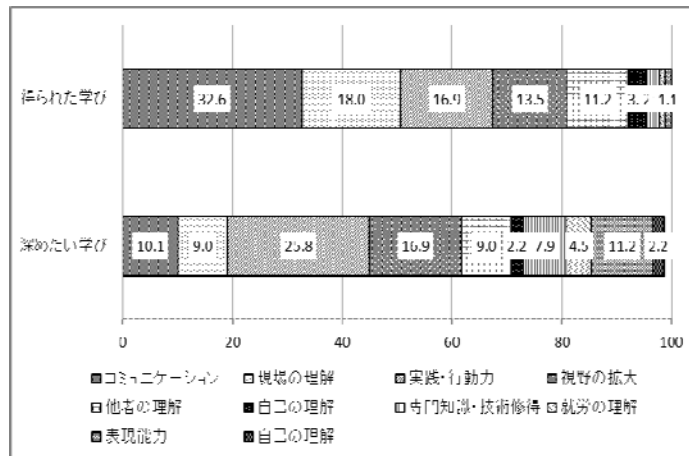
本研究で得られた回答は、本教育プログラムの個人成績に影響が及ばないことを配布時

に伝えた。また、回答はすべて統計的に処理を行い、個人が特定されないよう配慮している。

4. 研究結果

1) 本教育プログラムから得られた学びと今後深めたい学び

本教育プログラムで最も得られた学びは、「コミュニケーション能力が高まった」(32.6%)であり、次いで、「現場を理解した」(18.0%)であった。本教育プログラムは4年間の継続した取り組みであり、現在、1年または2年間、本学関連施設で実践を重ねる学生の多くは、「コミュニケーション能力」(1年;48.6%および2年;24.3%)の学びを挙げる一方、3年間(本学関連施設に加えて外部の社会福祉・教育現場)



で実践を重ねる学生からは「現場の理解」(41.1%)が最も得られた学びと回答した。そして、今後の学びとして期待していることは、「実践・行動力」(25.8%)であった。大学の講義で学び得る専門的な知識や技術を活用し、社会福祉・教育現場で必要とされる人材を目指している傾向があった。

2) 実践を通じて変容した社会福祉・教育現場の印象

学生は、長期にわたる継続した実践や学習から、社会福祉・教育現場の印象が変わっていることが明らかであった。(95.5%)。そして、具体的に変容した理由は、「現場を理解することができた」(39.3%)と回答している。また、「仕事の内容を理解できた」(19.1%)が続いていることから、大学入学以前までの体験や学習からは得られない社会福祉・教育現場の理解につながっている。実践と学習の積み重ねが、社会福祉・教育分野の幅広い理解に結びついていることがわかる。

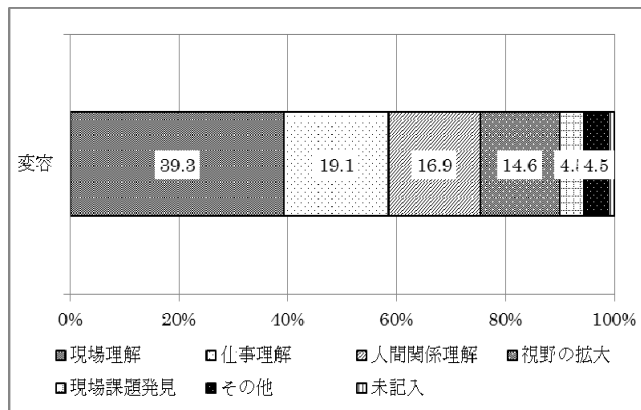


図2. 社会福祉・教育現場の変容理由 (N=89)

以上の結果から、本教育プログラムは、社会福祉・教育専門職として必要とされる知識や技術ばかりでなく、福祉・教育分野のこれからの方向性や自己の在るべき姿を探ることに重要な意味をもっている。加えて、専門職養成課程の基盤に成り立つことを述べ、本教育プログラムの発展に努力していきたい。